

## 石井方式漢字の早教育

井深 大

(ソニー名誉会長・幼児開発協会理事長)

漢字は読みにくく書きにくい、むずかしい文字である。したがって、文字の教え方の順序は読みやすく書きやすい仮名から始めるのが常道であり、無理のない教育方法である、というのが一般の通念、通説になっている。文部省も今のところ、この考え方で指導しているようである。

この考え方からすれば、まだ頭脳がじゅうぶんに発達していない幼児には、なるべく文字などを先走って教えるものではない。ましてや、ひら仮名をじゅうぶんに読めないうちに、漢字などというものを教えることなどはトンデモナイことなのである。

ところが、この通念に真向うから挑戦するような新説を打ち出した先生がいる。その新説の提唱者が石井勲先生である。

この説によれば、「漢字教育の欠陥の原因は、『読むこと』と『書くこと』とを同時に正確に行なわなければならないという考え方にとらわれすぎているため、『書きにくいことは、すなわちむずかしい。だから漢字はむずかしい』というふうに論理が飛躍してしまったところにある」といえるようだ。

漢字を幼児の時から教える場合、「石井方式」では、書くことよりも、まず認識させることに力点をおくのである。たとえば、「亀」という字は、それを見た瞬間、「ああこの字は動物のカメを表わす字だな」ということがわかりさえすればよいのである。これだと字画の複雑な漢字のほうかむしろ具象的ということになるから、書くことはむずかしくとも、認識する(何を意味するかを理解する)ほうはかえってやさしい、ということになる。

そして、このような「直観的認識」「記憶力」というものは、幼児の時のほうがむしろ強い、ということも実験的に証明されている。だから、この能力の盛んな幼時期に、漢字を教える……のではなく、**自然に覚える**ように適切に導くことが肝要なのである。「書くこと」については、ある程度年齢が進んでからにすればよい。

石井方式の原則を要約すれば、第一は、『社会で一般に漢字で書き表わしている言葉は、初めから漢字で書き表わして**認識**させたほうがよい』ということである(たとえば、汽車を「きしゃ」と教えるのではなく、初めから「汽車」と覚えこませたほうがよい、というのである)。従来の方式のように、最初は仮名書きをはじめ、あとで漢字書きに移るということは二重の手間であり、かえって混乱させる。

第二の原則として、『社会科用語に出てくる漢字は社会科で、理数科のそれは理数科の教科で指導すべきであり、従来のように、その学年までに習う国語の教科書に出ていない漢字は他教科のテキスト

などに盛るべきではない、といった考え方は改めるべきである』ということになる。

以上が「石井方式」の概要であるが、従来の漢字教育方式の通念(漢字はむずかしい)を「天動説」とすれば、石井先生のそれは、まさに「地動説」的発想ということにもなる。

この「地動説」を提唱された石井先生は、百の説法より一つの実行ということで、この新説を実証するための教育を思い立たれ、当時勤められていた(昭和26年以來)八王子の教育委員会の指導主事の職を辞され、昭和28年から新宿区の淀橋第一小学校、次いで四谷第七小学校でそれぞれ教鞭をとられ、新方式による漢字教育を実際に試み、そのかたわら、他の小学校にも助言されるなどして、旧来のそれとの比較データを出されたのである。

その結果、この新説を裏付ける多くの成果をあげられたのである。たとえば、ある小学校の一学年においては、漢字の習得字数の平均が文部省の一年間の目標字数の7、8倍、最低の生徒でも文部省のその3倍(最高約400字、最低約130字)近い漢字を習得したという例などがある。

石井先生が行なっておられる漢字教育の実験のうち、幼児に対するものの一例を紹介しておこう。

「石井方式」による幼児漢字教育の実験は、大体、3、4歳ぐらいの幼児30名ほどを集めて行なわれる。まず先生が大きな画用紙に、た

とえば「森」という字を書く。そして、その森に関係したおとぎ話を子供たちに聞かせてやる。そのようなおとぎ話を二回ぐらい聞かせる。その間に、おとぎ話の内容を示す絵本・絵図と「森」という字との関係を自然に感じとらせるようにする。それが終わった次の瞬間にパッと「森」という字を書いた紙をさし、「皆さん、これはなんという字だと思いますか」と聞くと、これら3歳、4歳の子供の中の70ないし80%以上の者が「もり！」と勢いよく答えるのである。冒頭で述べたように、「書けること」とは別問題であるが……。要は、この幼児段階で「あれは『森』という字だ」ということを自然に覚えさせることが主眼となるのだ。

幼児がこのように漢字の意味を認識・理解・記憶する能力というものは、一般に考えられている以上に高いものであるが、しかしこれも小学校二年生になると、もうすでに下り坂になるそうである。このことは数多くの実験の結果わかった、きわめてはっきりした事実なのである。にもかかわらず、従来の教育方式では、その「下り坂」になりつつある時期に、漢字をたくさん教え込み、また同時に一点一画もまちがいのないように正確に書くことを要求するので、これを習う者にとっては、二重の労力・負担となるわけであり、「教育時間の効率」という見地からすれば、はなはだ効率の悪いやり方といわざるを得ない。

このように、今の文教当局の指導方針では、「小学校では何百字しか覚えてはいけない」とか、あるいは「英語などの外国語は原則として中学以上で教えるべきものである」とか、その他いろいろとガンジガラ

メの制限を加え、ちょうど覚え盛りの時期に、物を教えないように、教えないようにしているのではないか、という感じさえするのである。

これでは、人間能力の成長、発達段階を生かした教育とはいえない。これまで**早教育**という言葉が盛んに使ってきたが、厳密に言えば「早」ではない。**人間の発達段階を生かした教育**という意味での「早」であり、従来の通念からみれば「早目」に見える、というわけである。

以上、「教育時間の効果」の観点から早教育の効用を述べてきたが、もちろんかくいう私自身、このことを外部に確言するまでには、従来の通念や常識からくるいろいろな心配があった。たとえば、「幼い子供たちをつかまえて、ギュウギュウつめ込んだあげく、頭がおかしくなったり、あるいはノイローゼになるおそれはないか」と懸念した。そこで私は、このことについてその道の権威ある関係者(大脳生理学者・心理学者など)の意見をいろいろと聞いてみたのである。

私の質問に対し、科学的な分野の専門家以外の人たち、あるいは私が問題としていることについてよく掘り下げて考え、研究されておられるとは**思われない**方々は、たいてい「そのような早期教育は無理で、なるべくしない方がよい」、あるいは「絶対にいけない」などと盛んにいわれる。文部省関係でも同様であった。

これに対して、科学的な分野でその種のことについて研究、あるいは関係しておられる方々、あるいはこの問題を掘り下げて考え研究し

ておられると思われる方々の多くは、早教育に対して「賛成」あるいは「推奨」の意見であった。「早教育はいっこうにさしつかえない。人間の頭脳というものは、言わば『胃袋』のようなものである。食べたくないもの、食べきれないものは、どんな形で口もとへ持って行っても受けつけない。頭脳も同じだ。とても覚えられないような複雑・難解なものは頭に残るわけがない。早教育でも、子供たちがそれを**受けつけ**喜んで、あるいは自然に**覚えようとする**かぎり、それはいっこうにさしつかえない。むしろ積極的にやったほうがよい」という意見であった。

これらの賛否の意見を比較検討してみると、やはり後者のほうが当を得ていると思うし、またそれを裏付ける実験例を数多く見聞きした結果、一応だいじょうぶである、という確信を得た。そこで今後もこのような運動(早期教育の研究推奨)を続けて行きたいと思っている。

(「漢字漢文」昭和48年6月号)